

# 大谷學報 第十六卷 第三號

## 往生傳の始源(二)

加藤智學

### 四

迦毗羅衛 (Kapilavastu) の城主、首圖駄那 (Suddhodana 淨飯) 王の後を繼ぎて釋迦 (Śākya) 族の主長たりし摩訶男 (Mahānāma 大名) 王は、甘露飯 (Amitodana) 王の子なりとも斛飯 (Drotodana) 王の子なりとも云はれ、釋尊の從兄弟にして、篤信なる優婆塞であつた。『雜阿含經』三十三には、第九經より第十八經に互り、『別譯雜阿含經』八には、第二十經より第二十八經に互りて、摩訶男王の求道受法の事蹟が種々に記叙せられてゐる。佛は迦毗羅衛國の尼拘律園 (Nyagrodhā-rīma) に於て、摩訶男の間に應じて、或時には、優婆塞 (Upāsaka 清信士) の信具足・戒具足・聞具足・捨具足・慧具足の五法を説き、或時には、優婆塞の須陀洹 (Srotāpanna 預流)・斯陀含 (Sakṛdāgāmi 一來)・阿那含 (Anāgāmi 不還) の三果を説き、或時には、學地に在りて上昇して安穩涅槃に進道せんが

爲に修習すべき念佛・念僧・念戒・念施・念天の六念の法を説かせられた。此の『雜阿含』三十三の第九經には、佛かの五法を請問せるに答へて、先づ「優婆塞は如來の所に於て正信を本と爲す。堅固にして動かし難し。諸の沙門・婆羅門・諸の天・魔・梵・及び餘の世間の壞する能はざる所なり。摩訶男。是を優婆塞の信具足と名づく」と、念佛の信心の金剛堅固なるべきを訓へ、正信爲本の義趣を告げて、優婆塞としての正信と戒（五戒）と聞持と施捨（解脫施・勤施・常施・平等施）と智慧（苦・集・滅・道の如實知）との五法具足を勸説せられた。其の第十三經には、亦かの請問に答へて、佛は涅槃に昇進すべき行法として六念を教授し、先づ其の念佛を説示して、「聖弟子、如來事を念せよ。如來・應・等正覺・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と。聖弟子、是くの如く念する時、貪欲纏を起さず、瞋恚愚癡の心を起さず、其の心、正直にして、如來の義を得、如來の正法を得、如來の正法に於て如來の所に於て隨喜の心を得、隨喜の心已りて歡悅し、歡悅し已りて身猗息し、身猗息し已りて覺受樂し、覺受樂し已りて其の心定まり、心定まり已りて彼の聖弟子は、兇嶮なる衆生の中に於て諸の罣闕なく、法の流水に入りて、乃し涅槃に至らん」と告げて、如來と法と僧と戒と施と天とを念する六念の行法を教へ、安樂なる涅槃に上昇せんと欲求して是くの如く修習すれば疾く涅槃を得て速に諸漏を盡くし後有を受けざるべしと訓示せられた。かくて、摩訶男王は、恒に佛所に詣で、佛の教説を聽聞し、清淨の信心を發起し、六念を修め、五法を具足し、優

婆塞として正信念佛の淨業を受行したのである。さるほどに、摩訶男王を主長とする迦毗羅衛城の人々には、幾多の篤信なる優婆塞があつた。『雜阿含』三十三の第十經によれば、摩訶男は、或時、五百人の優婆塞と與に尼拘律園の佛所に詣で、優婆塞の意義と優婆塞の須陀洹・斯陀含・阿那含の如何なるものなるかを尋問した。佛は彼等の爲に優婆塞の如何なるものなるかを告げ、在家の清信士の修得すべき須陀洹・斯陀含・阿那含の有學三果の意義を答説せられた。摩訶男は、五百の優婆塞を顧視して、「奇なる哉、諸の優婆塞、在家にして清白なれば、乃ち是くの如き深妙なる功徳を得ん」と感嘆し、歡喜し隨喜したと傳へられてゐる。されば、迦毗羅衛城に於ける摩訶男及び幾多の優婆塞は、佛を念じ、正法を念じ、僧衆を念じ、金剛不壞の淨信を獲て、五法・六念等の正道を受行し、在家にして有學三果の何れかの道位を逮得し、命終して勝處に往生し、安穩なる涅槃の證果に進趣したのである。

有學三果の道人は、命終して善處勝處に往生して涅槃に趣向するものであるが、在家の清信士は、たとひ須陀洹の不退轉を得たとしても、また斯陀含・阿那含の道位を逮得したとしても、世間多端の事縁に接して念佛念法等の志念の亂失することもあるべく、臨終に心意散亂して正念を失却し、雜縁に煩はされて恐怖し亂想して命終することもあるべく、其の時、必定して勝處に往生することを得るや否や、是れ在家優婆塞の時々に思慮せざるを得ざりし修道上の實際問題であつた。摩訶

男は此の疑問を解決せんが爲に尼拘律園の佛所に往詣したことがある。『雜阿含』三十三の第十二經には、其の時の摩訶男の問と佛の教説とが、斯くの如くに記傳せられてゐる。「世尊。此の迦毗羅衛國は、安穩豐樂にして人民熾盛なり。我毎に出入する時、衆多翼従し、狂象、狂人、狂乘、常に是と俱なり。我自ら恐る、此の諸狂と俱に生じ俱に死し、念佛・念法・念比丘僧を忘れんことを。我自ら思惟す、命終の時、當に何處に生すべきやと。」「恐るゝ莫れ、怖るゝ莫れ、命終の後、惡趣に生せず、終に亦惡なし。譬へば大樹の如し、順下し順注し順輸せんに、若し根本を截れば、當に何處に墮すべきや。』彼の順下し順注し順輸せるに隨はん。』汝も亦是くの如し。若し命終らん時、惡趣に生せず、終に亦惡なし。所以は何ん。汝は已に長夜に念佛・念法・念僧を修習す。若し命終る時、此の身、若は火にて焼き、若は塚間に棄て、風に飄り、日に暴し、久くして塵末と成らん。而して心意識、久遠長夜に、正信に熏せられ、戒と施と聞と慧とに熏せられ、神識上昇して安樂處に向ひ、未來、天に生せん。」此の問答によりて、當時の迦毗羅衛城の殷盛、車馬往來の繁忙、人象狂奔の狀態が想像せられ、かゝる都城に王者の生活を爲せる摩訶男が、衆多の士臣を翼従せしめて内外に出動し、繁雜なる事縁に遭遇しつゝも、常に死生岸頭に立ちて念佛念法念僧の志念を亂失せざらんことをこゝろがけ、臨終に正念相續せずして命終したらんには當に何處に往生するであらうかと、後生の一大事を念頭にかけて、慇懃に聞法修道したりし、其の心情が窺はるゝことである。か

かる篤信なる優婆塞に對して、佛は、まことに適切なる分り易き譬喩を以て說法せられた。傾ける大樹を伐截すれば其の傾ける方へ倒れるが如く、汝の如く常に念佛して正信と戒と聞と施と慧との五法に薰せられたる者は、たとひ臨終に雜縁のため念佛を忘失しても、命終の後、惡趣に墮せず、必ず神識上昇して安樂處に往生するであらうと、懇切に訓示せられた。蓋し此の聖訓は平生業成の義趣を告げられたものである。平生に業事成辨して不退轉を得、臨終の正念を期するを要せざる、念佛往生の大義を指授せられたものと、拜することができる。此の經をば『別譯雜阿含經』八には第二十三經として編傳してゐる。かくて又摩訶男と世尊との斯かる問答は、『增一阿含』三十五の「莫畏品」の第一經にも記傳せられてゐて、此の『增一阿含』の所傳には、三消滅の義その他の法義が添説せられてゐる。龍樹菩薩は『大智度論』十八に『雜阿含』別譯雜阿含所傳の此の問答を分り易く記述して居らるゝ。道綽禪師は『安樂集』上二十に、此の『智度論』所載の佛の教説を手短かに取意して引出せられ、「佛、大王に告げたまひしが如し、人、善行を積めば、死して惡念なし、樹の先に傾けるに倒るゝには必ず曲れるに隨ふが如くなり」と記載せられた。さるほどに、『略論安樂淨土義』の終に、彼の『安樂集』の章句と殆ど同様の文字が列記せられてゐて、「佛、大王に告げたまひしが如し」を「佛、頻婆娑羅王に告げたまひしが如し」と記してあり。『略論』の作者は、『智度論』を見ずして錯誤したりしと想はる。『略論』は曇鸞大師の作とも云ひ傳へられてゐるが、四論に精通し給ふ

曇鸞大師に斯かる誤記があらうとは想はれぬ。門下の徒輩によりて編作せられしには非ざるか。此の摩訶男王と頻婆娑羅王との混濫は、『略論』を學讀する者の特に注意すべき事柄である。

摩訶男王は正信念佛の優婆塞であり平生業成の篤信者であつた。佛の慈教に信順して念佛往生の大利を疑はず、臨終には如何なる事變に遭遇するやも知れずと、恒に覺悟して、平生に佛を念じ法を念じ僧を念じて淨業を受修しつゝ、政治・軍事・等にも心を勞して、その優婆塞の王としての生涯を送つたのである。さるほどに、迦毗羅衛城は、橋薩羅 (Kosala) 國の毗流離 (Vidūḍabha 惡生) 王に攻略せられ、釋迦族は、かの惡王の怨恨の爲に慶殺せられねばならぬことゝ成つた。是れ釋尊の御入滅に近き晩年に起りし最大悲劇である。毗流離王は波斯匿 (Pṛasenajit) 王の子にして、其の母は摩訶男が下婢に生ませし娘であつた。かうした親族の間に、宿業の因縁のがれ難くして、いとも殘忍なる慘劇が演ぜらるゝことゝなつた。毗流離王の大軍が迦毗羅衛城に來襲して、猛烈に攻撃し、城の將に陥落せんとする時、城門を開き、摩訶男は毗流離王の所に往き、「我いま水底に没在する其の暫くの間に城内の釋迦族の遁ぐる者あらば逃走するを得しめて、我水より出でなば意のまゝに殺戮せよ」と、幾らかの人命の救はれんことを請願した。毗流離王は之を聽許した。そこで摩訶男は池水の底に身を沈め、頭髮を樹の根に縛り付けて命終る。毗流離王は、摩訶男の水中より出で來らざるを怪み、臣をして水中に入らしむ。諸臣、王の命令により水中に入り摩訶男を出す。其の

時には已に摩訶男は命終つて居た。かくて毗流離王は九千九百九十萬人を殺し、流血、河を成したと、云ひ傳へられてゐる。此は是れ『増一阿含』二十六「等見品」の第二經に記傳する所である。九千九百九十萬人を殺したとは、頗る大袈裟に書き過ぎては居るが、以て如何に慘憺たる光景なりしかを推想すべきである。此の事變は『根本説一切有部毘奈耶雜事』九にも記述せられてゐる。それには「釋種七萬七千を枉殺す」と記してあり。此の方が事實に近い記傳かと想はるゝ。かゝる慘憺たる落城の大悲劇に當面して、摩訶男王は、釋迦族の幾多の人命を救はんと欲して、池水に身を沈めて、自殺して命終つたのであつた。死の縁は無量である。火に焼かれて死する者もあるべし。水に溺れて死する者もあるべし。病に罹りて死する者もあるべし。刀に斬られて死する者もあるべし。業報なれば人々は如何なる死に様をして世を去らねばならぬかも分らぬ。かゝる時、臨終に心亂れず正念にして命終るといふことが能きるか何うか。摩訶男は嘗て此の大事を思慮して佛の慈誨に接し、平生業成の教旨を聽受し、決定往生の信心を獲得し、常に念佛して淨業を相續したのであつた。かくて遂に其の終焉は斯かる大慘劇の間に處して水底に自殺したのであるが、今ぞ正に佛の指教の如くに、必定して安樂處に往生し道果を逮得して涅槃に趣向したであらう。蓋し是れ佛在世に於ける信心あつき求道者であり在家念佛往生の最勝人である。

## 五

迦毗羅衛城陷落の時、毗流離 (Vitadaha) 王は、群臣に命じて、釋迦族の士民を盡殺せしめたのであるが、頗る多數であつて、一々刀劍を以て斬殺するといふことは面倒であるから、地中に埋めて暴象をして踏殺せしめた。かくて王は亦群臣に令して、容姿端麗なる釋迦族の女五百人を選んで王の所に將詣せしめた。王は迦毗羅衛城を焼き拂つて尼拘留園 (Nyagrodhāraṇa) に往き、五百人の釋女を引見して、「汝等、慎みて憂愁してはならぬ、今日より我は汝の夫、汝は我が婦である、要す相接せよ」と告げて、手を舒べて其の中の一人の女を捉へて之を弄ばんとした。女は「大王、何を爲さるゝぞ」と問うた。王は「汝と情通せんと欲す」と答へた。女は憤つて「我今いかで婢生の種と情通せんや」と叫んだ。げに毗流離王は摩訶男王と其の下婢との間に生れた娘を母として生れた王子である。憍薩羅 (Kosali) 國の波斯匿 (Prasenajit) 王が、釋迦族の王女を迎へて后妃とせんと欲して使臣を迦毗羅衛城へ遣はした時に、釋迦の王族は會議して、其の種姓を誇り、憍薩羅の王統を輕蔑して、王女を彼の國に嫁せしむることを好まず、仍て摩訶男は、國交の破綻を懼れて、其の家婢に生ませたる一女の面貌すぐれて端麗なりしを、王女の如くに莊嚴して、寶羽の車に載せて彼の國へ送つたのである。波斯匿王は大に喜んで此の女を迎へて第一夫人として其の間に出生したのが毗流離太子であつた。釋迦族の人々は此の事情を知つて居るから毗流離王子を婢生の子として蔑視したものである。毗流離太子が八歳の時に射術を學ばんが爲に迦毗羅衛に往き、新築の講堂の師



子座に昇りて、釋迦族の人に叱られ、「此の婢生の子が」と侮辱せられ、其の怨恨、骨髓に徹して、父王命終の後、王位に即き、今その昔の怨を晴さんが爲に迦毗羅衛城征伐を思ひ立つたのである。かくて釋迦族の老少男女を塵殺し、美女を捉へて情交を行はんとして、今亦その釋女より「いかで婢生の種と情通せんや」と、あさましく侮蔑せられた。そこで毗流離王は大に瞋り、群臣に命じて其の手足を兀り、深き坑に投げ落とした。五百人の女は皆「誰か此の身を持つて婢生の種と交接するものぞ」と王を罵つた。毗流離王は愈よ怒つて、此の五百人の女を、手足を兀つて深き坑の中へ投げ入れた。五百の釋女は、手を斬られ足を截られて坑の中に苦悶し、自歸して如來の名號を稱喚し、「如來は、此に於て、亦此の間より、出家し、學道して、後に成佛したまへり。然るに佛は、今日、永く、此の苦惱に遭ひ毒痛を受くることを憶せられず。世尊。何が故に憶せられざるや」と、怨むが如くに叫んだ。爾の時、世尊は、天耳を以て此の釋女の稱名し怨喚するを聞き給ひて、直ちに諸の比丘を將ゐて、舍衛城(Sravasti)を出發して迦毗羅衛へ趣向せられた。五百の釋女は、世尊が諸比丘を將ゐて來臨し給ふを見たてまつり、皆、慚愧の念ひを懷いた。世尊は、此の可憐なる諸女の爲め、微妙の法を説授せられた。「諸法は皆當に離散すべし。會へば別離あり。諸女。當に知るべし。此の五盛陰(色・受・想・行・識)は、皆當に此の苦痛諸惱を受けて五趣の中に墮すべし。それ五盛陰の身を受くれば、必ず當に此の行報を受くべし。行報あるを以て便ち胎を受くべし。已に胎を

受くれば復當に苦樂の報を受くべし。設し當に五盛陰なければ便ちまた形を受けず。若し形を受けざれば則ち生あること無し。生あること無ければ則ち老あること無し。老あること無ければ則ち病あること無し。病あること無ければ則ち死あること無し。死あること無ければ則ち合會して別離するの惱み無し。是の故に、諸女、當に此の五陰成敗の變を念すべし。然る所以は。五陰を知れば則ち五欲を知る。五欲を知れば則ち愛法を知る。愛法を知れば則ち染著の法を知る。此の衆事を知り已れば則ちまた胎を受けず。胎を受けざれば則ち生老病死なし」と。斯くの如く、世尊は、釋女の爲に法を説き、施と戒と生天との法義を講論し、欲は不淨の想にして出要をこそ樂と爲すべき眞諦を告げ、諸女の心意の開解したるを觀そなはして、苦集滅道の四聖諦の法を説示せられた。五百人の釋女は、佛の斯かる懇切なる説法を聽受して、諸の塵垢盡き、法眼淨を得て、各其の處にて命終りて、皆、天上に往生した。世尊は、城の東門に到り、城中の煙火洞然たるを見て、即ち此の偈を唱説せられた。

一切の行は無常なり。

生ずれば必ず死あり。

生ぜざれば則ち死せず。

此の滅を最樂と爲す。

如上の物語は『増一阿含』二十六「等見品」の第二經に記傳する所である。佛の説き給ひし如上の偈は、後に『大般涅槃經』十三の「聖行品」に於ては、佛の過去本生、雪山に住して難行苦行を修す

る時、帝釋天、身を變じて羅刹と爲り、その菩薩苦行者の爲に、過去佛所説の偈を宣示したといふ、斯うした本生説話の中に、その過去佛の所説の偈として叙傳せられてゐる。

諸行は無常なり。

是れ生滅の法なり。

生滅、滅し已りて、

寂滅を樂と爲す。

我が國の古聖歌、弘法大師の御作なりと云ひ傳ふる「いろは歌」は、實に此の『大般涅槃經』に説かるゝ斯の四句の偈の意を取りて製作せられたものである。

一切行無常

諸行無常

色は匂へど散りぬるを

生者必有死

是生滅法

我が世誰ぞ常ならむ

不生則不死

生滅滅已

有爲の奥山けふ越えて

此滅爲最樂

寂滅爲樂

淺き夢みじ酔ひもせず。

一切の行と云ひ諸行と云ふ、この行は遷流の義にして有爲法のことである。有爲の諸法は衆縁によりて造作せられ遷流するものなるが故に行と云ふ。有爲轉變の世相は諸行無常である。『平家物語』の初には、「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり」と記す。げに殷盛なりし迦毗羅衛城は焼土と化し、釋迦王族の榮華は夢の如く幻の如く消滅して、幾萬の尸屍累々、酸鼻を極めたる屍山血河の戦跡を眺めては、大悲救世の佛心やるせなく、如來慈愍の心光、斯の慘憺たる幻滅の世界に流照して、

かの尊き四句の偈頌は唱說せられたのであつた。

『根本説一切有部毘奈耶雜事』九の記傳は、聊か如上の傳説に異なるものがある。其の所傳に據れば、毗流離（惡生）王は、釋迦種族七萬七千人を枉殺し、五百人の釋女を將ゐて本國に還り、宮殿に在りて自己の大力勇健を誇讚し、釋女が王の惡行と自讚を罵りたる歌を聞きて、大に暈り、諸臣に命じて、五百人の釋女を引き出して、波吒羅池の邊に於て其の手足を截らしめた。五百人の釋女は手足を斬られて苦痛に堪へられず、是の念を作す。「我等は今、諸苦、身に逼り、痛み堪へ難し。世尊。なんぞ愍みを垂れたまはざる。諸佛の常法、一事として覺了したまはざること有ること無し」と。爾の時、世尊は、大悲心を起して、其の處に到りて、諸の釋女の露形にして坐せるを見たまふた。神通力を以て諸の釋女の苦痛を除き、告げて言はく、「汝等、善女人、自ら斯かる業を作りて、今時に成熟す。必ず自ら受くべし。人の肯て代る無からん」と。世尊は斯くの如く説示して此處を去らせられた。彼の諸の釋女は、世尊の慈教を仰ぎて清淨の信心を發得し、やがて命終りて四天王宮に往生した。さるほどに、天上に往生したる彼等は、その前身、人趣に於て死し、今、四天王宮に生じたるは、世尊の處に於て清淨の信心を發起したるに由ると、かやうに憶想して、「我等いま往いて世尊を敬禮せざるべからず」と思念し、各その身を嚴飾し、光明殊妙にして、便ち天衣に諸の美しき天華を盛り、初夜を過ぎたる時分に佛の所に來詣した。かくて五百の天女は、天華を供養し

佛の雙足を禮し、一面に坐して妙法を聽受した。時に諸の天女の光明赫奕として遍く逝多林 (Veta-vana) を照耀した。世尊は、諸の天女の意樂と根性に隨ひ、爲に妙法を説き、彼等をして四聖諦の眞理を悟得せしめられた。諸の天女は金剛智を以て二十薩迦耶見 (sakkāya-diṣṭi 有身見) を摧破し須陀洹(預流)果を得た。かくて天女は偈を説きて佛恩に感謝した。

我、佛力に由るが故に、  
永く三惡道を閉じ、

勝妙なる天に生ずることを得て、  
長く涅槃の路に歸す。

我、世尊に依るが故に、  
今、清淨眼を得て、

眞諦の理を證見し、  
當に苦海の際を盡くすべし。

人天を超出して、  
生老死の患を離る。

有海の中に遇ひ難くして  
我逢うて、今越ゆることを得たり。

我、莊嚴身を以て、  
淨心にて佛足を禮し

右繞して、怨者を除き、  
今往いて天宮に赴く。

五百の天女は、その所願をかなへて、商主の多く財利を獲たるが如く、農夫の廣く田實を收めたるが如く、勇健者の諸怨を降伏したるが如く、重患人の衆病を除去したるが如くに、大に歡喜し、佛所を辭して、俱に天宮へ歸去した。此の所傳に據れば、五百人の釋女は、毗流離王の爲に手足を截

られ、其の臨末に佛の慈教を受け、清淨の信念を發起し、四大王衆天に往生し、天界に於て佛恩を憶念し、佛所に來詣して妙法を聽受し、四聖諦を了悟して須陀洹果を得、とこしへに涅槃の道に歸趣したのである。

原始時代の往生者の記傳には、往々その往生したる天界より此の人界の佛所へ來詣して佛を禮拜し佛恩に謝したことが叙說せられてゐる。『増一阿含』四十九の第八經には、阿那邠那 (Anāthapiṇḍita) 長者が三十三天 (忉利天) に往生して彼の天界より舍衛國の祇樹給孤獨園に來至し如來の身上に天華を散じて報謝したことが記傳せられてゐる。又『長阿含』五の『闍尼沙經』には、頻婆娑羅 (Bimbisāra) 王が生天して毗沙門天王の太子と爲り闍尼沙 (Janavijābha) と稱したる其の闍尼沙が佛所に來詣して其の一心に念佛して往生得道したる身の仕合せを言上したことが叙說せられてゐる。かくて今此の『根本說一切有部毘奈耶雜事』にも、惡生王に斬殺せられたる五百人の釋女が四天王宮に往生して彼の天界より逝多林の佛所に來詣し天華を供養し佛足を禮し聞法得道したことが記傳せられてゐるのである。されば、此等の傳説には、佛敎の原始時代に於ける往生傳文學として味讀すべき特殊の色彩が觀取せらるゝ。史實に超異せる記録とも見らるゝことなれども、何等か斯うした物語の傳持せられねばならない勝妙なる事蹟が有つたものと考へざるを得ない。さるほどに、此等の物語の中には、かの阿那邠那天子が「我いま此の天身を獲たるは、みな如來の恩に由る」と念言し、

今この天女の唱説したる偈頌には、「我、佛力に由るが故に、永く三惡道を閉じ、勝妙なる天に生ずることを得て、長く涅槃の路に歸す」と嘆詠し、佛力他方に信賴し、勝妙なる往生の得益を喜び、深く佛恩に感謝せる、此等篤信なる往生者の志念が偲ばるゝ。かくて、斯うした記述によりて、原始時代に於ける念佛往生者の他力佛恩の信樂の深厚なりしことを思想せなければならぬ。

釋女得道の事蹟は、有名なる物語となりて誦傳せられたものであるが、これには如上の傳説とは頗る異なる異説も流傳せられてゐる。『大般涅槃經』十四の「梵行品」には、萬二千の釋種の諸女が耳鼻手足を截られたりしも佛の慈心の力にて其の耳鼻手足は本の如くに還復し皆悉く發心出家して具足戒を受けたと叙説せられてゐる。此の經説は、佛が慈心の利益を説き給ひしとして誦傳したりし説話である。「復次に。善男子。流離太子、愚癡を以ての故に、其の父王を廢し、自ら立ちて主と爲り、また宿嫌を念じて多く釋種を害す。萬二千の釋種の諸女を取り、耳鼻を刑削し、手足を斷截して、之を坑塹に推す。時に諸の女人、身に苦惱を受け、是くの如き言を作さく。南無佛陀。南無佛陀。我等今は救護あること無しと。復次に號咷す。是の諸の女人は、已に先佛に於て諸の善根を種う。我、爾の時に於て竹林の中に在り、其の音聲を聞きて即ち慈心を起す。諸女、爾の時に、我的毗羅城に來至して水を以て創を洗ひ藥を以て之に塗るを見、苦痛尋いで除き、耳鼻手足、還復して本の如し。我、時に即ち爲に略して法要を説き、悉く俱に阿耨多羅三藐三菩提心を發さしむ。即

ち大愛道 (Mahiprajapati) 比丘尼の所に於て法の如く出家して具足戒を受けしむ。善男子。如來は、爾の時、實に迦毗羅城に往至して水を以て創を洗ひ藥を塗りて苦を止めたるにあらず。善男子。當に知るべし、皆是れ慈善根の方、彼の女人をして是くの如き事を見せしむ。此の經説は、如上の史傳の變化して誦持せられしものである。萬二千の釋種の諸女と説かれてゐるけれども、此は五百の釋女と云ひ傳へて居る方が史實に近いであらう。斬られた手足が還復したといふやうな事も、よほど變つた傳説であつて、史實としては受け取りにくい事である。然し創の淺い人々も有つたかも知れぬから、佛の恩容を拜し、説法を聞き、佛の慈心の力を加被せられて、其の瘡が癒えて、發心出家した人々が、無かつたとも云はれまい。さうした釋女も有つたところから、斯うした物語が、大乘教徒によりて誦傳せられたのではあるまいか。此の所傳にありては、説話が幾らか大乘化せられて、悉く俱に阿耨多羅三藐三菩提心を發したと成つて居る。されば、此の經説によれば、此の時、此の釋迦族の諸女は、大菩提心を發起して大乘を修行する菩薩と爲つたわけである。然らば、其の當來の往生・得道をも、菩薩道を進趣する清信女として思想せなければならぬ。(つゞく)